

在校生・卒業生からのメッセージ



石原 美結さん
医療科学類 2 年生
東京都立
青山高等学校出身

皆さんこんにちは。医療科学類 2 年の石原美結です。こちらでは私が思う医療科学類の魅力についてお伝えします。

私が医療科学類に志望した動機は、幼い頃から医療や人体に興味があったということが主軸となっています。高校 3 年生になり受験勉強をしていくにつれ、医学を学ぶことの楽しさを発見し、大学では医療を学びこの先医療に関わる仕事がしたいと感じるようになりました。医療科学類は 4 年間で卒業でき国試の取得が必須ではないため、医学研究に集中できると思い志望しました。特に私は自己免疫疾患について関心があり、将来的には大学院まで進学し研究をしたいと考えております。

さて、医療科学類は主に臨床検査技師の資格取得を目指す医療科学専攻、医学研究を中心に行う国際医療科学専攻の 2 種類に分かれます。自分がどちらのコースに進むかは 2 年生の後半で決めるため、“将来の仕事はまだ漠然としているけど、とりあえず医学を学んでみたい”という方にもぜひ入っていただきたい学類です。学んでいくにつれ、自分の学びたい分野や将来の夢がきっと見つかるはずです。

1 年次の授業は主に座学で、医学の基礎を広く学びます。2 年次からは実習が増え、1 年生で学んだことを直接体験できる機会も増えます。

医療科学類は人数が少なく、必修が多いため自然とクラス全体で仲良くなる機会も多く、和気あいあいとしています。テスト前は協力しあって勉強したり、レポートで分からないところは教え合ったり、日々共に切磋琢磨できる仲間がいることがとても心強いです。学類の中で良い人間関係が築けることも医療科学類の魅力です。

カリキュラムが充実していて忙しい印象のある学類ではありますが、サークルやアルバイトとの両立もでき、長期休みには旅行にたくさん行ったりサークル活動に積極的に関わることもできました。

皆さんも興味を持ったらず医療科学類に来てください。ご入学、心からお待ちしております。



中島 玄太さん
国際医療科学主専攻 3 年生
私立
開明高等学校出身

皆さんこんにちは。医療科学類国際医療科学主専攻 3 年の中島玄太です。ここでは私が医療科学類で過ごしてきて感じたことなどを書かせていただきます。医療科学類での生活を少しでもイメージしていただければ幸いです。いきなりネガティブな内容になってしまいますが、私の学年である 3 年生は授業や実習が多く、日々のレポートを書くのに精一杯で、アルバイトなどと両立するのが大変です。しかし、あらゆる分野の実習を経験していく中で、実習一つ一つの内容は違えど、「この手技は前の実習でやったからもう自分でできるやん」と、今まで学んできたことを生かすことができ、成長を感じています。実習と聞くと実験室で黙々と実験するようなイメージを持たれるかもしれませんが、決してそんなことはなく、友達と意見を出し合い、疑問があれば先生にすぐ質問できるような明るい雰囲気、私は座学より実際に手を動かす実習が面白いです。また 3 年生は医療科学主専攻と国際医療科学主専攻の 2 つの主専攻に分かれる学年でもあります。2 つの大きな違いは研究室配属の時期です。国際医療科学主専攻は 3 年次、医療科学主専攻は 4 年次で研究室に所属します。このように研究室所属の時期は決まっていますが、自分の興味のあることがあれば、1 年次からでもその研究室で研究に触れることができます。そして国際医療科学主専攻は授業や研究室の中で英語を用いて発表する機会が多く、英語力を身に付けることができます。主専攻は分かれますが、授業や実習はほぼ学年全員で受けるので、「研究室で今こんなことをやっていて～」と話が盛り上がります。私も高校生の時から興味があった研究室に所属でき、ワクワクしています。入学する時点で行きたい研究室がなくても大丈夫です。1～2 年次の時の授業や、研究室見学などで自分の興味のある分野が見つかるはずです。私の友人も研究室希望のメールを送るギリギリまで悩んでいましたから安心してください。

医療科学類は学年の人数が少なく、少ないからこそ、先生との距離も近く、学年の仲間と助け合いながら成長していける素晴らしい環境だと感じています。

皆さんのご入学を心からお待ちしております。



神谷 紗良さん
国際医療科学主専攻 4 年生
(2023 年度編入学)
名古屋市立
向陽高等学校出身

皆さん、こんにちは。医療科学類国際医療科学主専攻 4 年の神谷紗良です。ここでは、私が医療科学類を志望したきっかけや、実際に入学してから感じた魅力についてお伝えしたいと思います。

医療科学類は、臨床検査技師や研究者を目指す学生が多く在籍している学類として知られていますが、私自身は其中でも特に研究に興味を持って入学しました。私はもともと高校時代から植物を対象とした研究に興味があり、生命現象を探究することの面白さに惹かれてきました。こうした経験から、生理学的な仕組みを幅広く理解したいという思いが芽生え、医療科学類への進学を決めました。現在は、睡眠に関する研究にも取り組んでおり、日常生活に身近な現象を科学的に捉える面白さを実感しています。

実際に医療科学類で学ぶ中で感じている魅力の 1 つは、人とのつながりの強さです。担任の先生はとても親身に相談してくださり、学業や進路について不安があっても安心して話すことができます。また、クラスメートも少人数である分距離が近く、総合学域群から進学した私に対しても分け隔てなく接してくれました。実習や勉強で困ったときには自然と助け合いが生まれ、時には切磋琢磨しながら、時には相談しあって難しいレポートに取り組むことができる、とても恵まれた環境だと感じています。

さらに、私はサークル活動にも力を入れており、全国大会優勝という目標に向けて取り組みながら、学業や研究との両立を目指してきました。忙しい日々ではありますが、自分のやりたいことに真剣に向き合えば、両立は十分に可能だと実感しています。そして、その挑戦を支えてくれる周囲の環境にも日々感謝しています。

将来の進路が明確に決まっていないう方や、「なんとなく医療や研究に興味がある」という段階の方でも、医療科学類には多様な研究室や学びの機会があり、自分のやりたいことを見つけていくことができます。皆さんにとっても、きっと充実した大学生活を送ることができる場所になると思います。

皆さんとこのキャンパスでお会いできる日を、心より楽しみにしています。



渡部 順子さん
医療科学専攻 4年生
東京都立
日比谷高等学校出身

皆さんこんにちは。医療科学類医療科学専攻4年の渡部順子です。ここでは、私が医療科学類を志望した理由と、実際に学んで感じた魅力についてお伝えします。

私は高校時代、将来やりたいことが明確に定まっていなかったため、幅広く学べる総合学域群に入学しました。様々な授業を受ける中で生物や医療分野に興味を持つようになり、臨床検査技師として医療に関わる道と、基礎研究に取り組む道の両方が開かれている医療科学類に魅力を感じ、進学を決めました。医療に興味があれば、進路が明確でなくても学びながら自分の方向性を見つけていける点が、本学類の大きな魅力だと感じています。

実際に学び始めて感じた魅力は、学生同士の距離の近さと学修しやすい点です。医療科学類では1学年が同じクラスのような形で授業を受けるため、高校に近い雰囲気があり、自然と周囲と協力しながら学ぶことができます。試験前には過去問の解説を共有したり、分からないところを教え合ったりと、支え合いながら学びを深めることができています。また、クラス担任の先生に学業や進路について気軽に相談でき、親身に話を聞いていただける点も安心して学べる理由の1つです。

さらに、海外研修などのプログラムも充実しており、私自身も3年次の夏にベトナムで約1か月の短期留学に参加しました。現地の学生と英語でコミュニケーションを取りながら、薬剤耐性菌の課題について考える中で、細菌が薬剤耐性を獲得するメカニズムなどの基礎研究が国際的な課題の解決に重要であることを実感し、非常に印象に残る経験となりました。

医療科学類は、進路の選択肢が広く、短期留学などに挑戦できる機会もあり、周囲のサポートを受けながら学べる環境が整っています。私自身も入学当初はやりたいことが明確ではありませんでしたが、現在は酵母を用いた老化に関する基礎研究に興味を持ち、卒業研究に取り組んでいます。

将来やりたいことがはっきり決まっていなくても、研究や医療に少しでも興味があれば、ぜひ医療科学類への進学を考えてみてください。



秋山 健太郎さん
2011年度卒業
株式会社LSIメディエンス
アンチドーピング
ラボラトリー

みなさんこんにちは。2011年度に医療科学類を卒業し、その後本学大学院修士・博士課程を修了した秋山と申します。現在は株式会社LSIメディエンスに所属し、各地から届くドーピング検体の分析と新規検査法の研究開発に携わっています。

高校時代の私は「医学研究に関わりたい、でもスポーツとも離れたくない」という思いを抱えていました。医学群と体育学群の双方を擁する筑波大学であれば、両分野に触れながら進路を考えられると考え、進学を決めました。その中で医学を重点的に学ぶことを志向し、医療科学類を選択しました。入学後は分子生物学や病態学といった医学系科目を中心に履修するとともに、講義や研究活動を通して多角的に医療を捉える機会を得ることができ、視野が大きく広がりました。

学生生活の中で特に印象に残っているのは、学類の枠を越えて多角的にアプローチした研究経験です。疾患モデルを用いて発症機序の解明に取り組むとともに、工学分野では造影MRIの検討、体育分野では運動効果の評価を行うなど、1つの現象に対して分野を横断しながら研究を進めました。総合大学ならではの環境で、異なる分野の視点を取り入れて考える経験は、その後の進路を考える上でも大きな財産になりました。

こうした経験は現在の業務にもつながっています。私の担っているドーピング検体の分析はアスリートの人生に関わる重要な検査であり、1つの物質に対して複数の手法から検証を行い、データの信頼性を担保しています。その過程で求められる正確な実験手技やデータ解析、国際的な場での発信に至るまで、学生時代に培った多角的に物事を捉える視点が大きな支えとなっています。その一例として、2021年に開催された東京オリンピックという国際的な大規模プロジェクトにおける分析業務にも携わりました。

これから進路を選ぶみなさんの中には、まだやりたいことが明確でない方もいると思います。しかし筑波大学には、様々な分野に触れながら興味を見つけていける環境があります。日々の学びや出会いの中で、自分なりの進路を形にしてください。皆さんの挑戦を応援しています。



沖田 結花里さん
2007年度卒業
筑波大学医学医療系
助教

高校生の頃、「なぜ人は病気になるのだろうか?」という純粋な疑問の答えを見つけない、「何らかの形で医療に携わる仕事に就きたい」という漠然とした思いで志望校を探していました。新聞記事を読み、より多くの患者さんを救う可能性のある「医学研究」に興味を持ったのもその頃です。医療科学類(当時は看護・医療科学類 医療科学専攻)が、高度なスキルを持つ臨床検査技師と研究者の両方の育成を掲げていることを知り、ここなら自分の可能性を広げられるはずだと受験を決めた日のことを、今でもよく覚えています。

本学類の魅力は、基礎から臨床までを地続きに学べる網羅的なカリキュラムにあります。低学年で生化学、人体構造学、生理機能学、病理組織学といった医学の土台を固め、実習で多様な検査手法を習得し、臨床実習や卒業研究へと進みます。私自身、約1年間にわたる卒業研究で、「世界中でまだ誰も知らないことを、自ら明らかにできる」研究の面白さと奥深さに出会いました。それをきっかけに大学院進学を決め、人生の舵を研究の道へと切ることになりました。当時は、まさか自分が教員として母校の教壇に立つ未来があるとは夢にも思っていませんでしたが、そんな予期せぬ道が開けたことも、本学類で得られる可能性の広さゆえだと思えます。実際に卒業後のキャリアパスは、臨床検査技師、一般企業への就職、大学院進学など、実に様々です。

大学での4年間は、自分の将来をじっくりと見定め、未来を切り拓くための準備期間でもあります。またこの広大なキャンパスで出会う恩師や仲間との絆は、一生の財産になることでしょう。かつての級友や今の教え子たちを見ていても、4年間の学びや出会いを糧に、それぞれが自分らしい専門性を社会の中で見出しています。自らの未来へ一歩踏み出すための力と自信」を、私たちと一緒にこの医療科学類で育んでいきましょう。